

聖書:ルカの福音書19章28～40節

説教:主がお入り用なのです

1 世の終わりの時

新しい年を迎えてほっとしていた時に能登で大地震が起こり、次の日は羽田で大事故と立て続けにいろいろなことが起きました。そして地球温暖化どころか地球沸騰の時代だと叫ばれる。だれもがこの先どうなるのかと不安になります。それは今の時代だけではなく、実は二千年前の人たちもそうでした。世の終わりが来るのではないか。来るとしたらそれはいつなのか。そんな不安を抱えていた。それで弟子たちがイエスに尋ねた。「世の終わる時のしるしは、どのようなものですか。」するとイエスはこのようにお答えになりました。マタイの福音書24章6, 7節。「また、戦争や戦争のうわさを聞くことにはなりますが、気をつけて、うろたえないようにしなさい。そういうことは必ず起きますが、まだ終わりではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで飢饉と地震が起こります。」

ときどき「終末は始まっているのか」と質問されたことがあります。すでに聖書に書いてあるとおりのことが起きていますから、終末の時代は始まっている。では私たちはそのまま指をくわえて滅びを待つしかないのか。そうではない。神はこの罪に満ちて大混乱に陥ってしまった世界と私たちを救おうと働いておられます。いったいどのようなことをしてくださっていたのか。ルカの福音書から見てまいります。

2 子ろばを連れてきなさい

1) イスラエルの王

今日開いている箇所は、イエスはおよそ三年半にわたる宣教活動を終えられ、エルサレムに入っていこうとしています。しかしそこにはイエスを畏にかけ、殺そうとしている人たちが待ち構えています。弟子たちも危険を感じ、できるならエルサレムには入りたくないと思っている。しかしイエスはエルサレムに真っ直ぐに進んでいき、エルサレムの町を全部見渡すことのできるオリブ山のふもとにまでやって来ます。そこでイエスはこう言われました。30, 31節。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、連れて来なさい。もし『どうして、ほ

どくのか』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」

イエスは歩くのに疲れたので、ろばに乗りたくなったのか。実はゼカリヤ書9章9節にこうある。「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」

イスラエルの人々はだれでもこのみことばを覚えていました。「あなたの王」とは、イスラエルを救う王のこと。本当の王が現れる時の様子がこうである。偽って「自分は救い主です」と言う者が現れてもだまされてはいけない。本当の救い主はこういう姿でやって来るのでそこで見分けなさい、ということ。もちろんイエスは真の救い主ですから、ゼカリヤ書のみことばのとおり子ろばに乗る。それでわざわざ子ろばを連れてこさせるわけです。

2) 子ろばを借りるまで

「なるほど」と一旦納得します。がしかし、子ろば一匹を連れてくるという単純なことなのに、話しが少し入り組んでいるように感じないでしょうか。

こういうことです。弟子たちが指定された場所に行ってみると、言われたとおりに子ろばを見つけました。普通はここでどうしますか。まず子ろばの持ち主のところに行って、貸していただけますかと確認しますよね。ところがいきなり主人に断りもなく、子ろばの綱をほどこしてしまう。もちろんこれはイエスの指示どおりなのですが、なぜそうさせたのか、引っかけを覚えます。当然のことですが不審に思った持ち主がやってきて「どうしてほどこのか」と尋ねます。そこで弟子たちはこれも指示されたとおりに「主がお入り用なのです」と答える。そうしたら子ろばを貸してくれた。

どう思いますか。疑問がいくつかある。一つ目。どうしてイエスは、主人に断らずにいきなり子ろばの綱をほどこしようと言ったのか。二つ目。弟子たちが「主がお入り用なのです」と答えたなら、持ち主がすぐに貸してくれた。でも普通はどうですか。「おまへたちは絶対に怪しい」と言われて、追い返されるのではないか。ところが子ろばの主人は簡単に納得するのです。

3 ほどく

1) 「どうして、ほどくのか」

「神の子であるイエスが主人たちの心を動かして、そう言わせたのだ」と言うのは簡単です。もしそうだとすると、これだけ細かく子ろばのことについて書いてあるのですから、そこにはなにか大切なことが含まれているのではないかと。

鍵となるのは「ほどく」ということばです。イエスが子ろばを必要としているのなら、ここはただひとつ「子ろばを連れてきなさい」と弟子たちに言えばいいはず。ところがイエスはわざわざ「それをほどいて」と言う。それだけではありません。子ろばの持ち主はなんと言ったか。「どうして、ほどくのか。」「どうして、連れて行くのか」ではないのです。それも偶然だったのか。そうではない。イエスがあらかじめあの人たちはこう言いますよと、念を押しています。これは偶然ではありません。なにか大切な意味があるので、わざわざ繰り返している。

聖書でこの「ほどく」ということばは、たとえば「舌のもつれが解けて、はっきり話せるようになった」というときの「解けて」とが「ほどく」と同じことば。「サタンに縛られていた娘が束縛から解かれる」という箇所もありますが、この「解く」がやはり「ほどく」と同じことばです。これを見ただけでも「ほどく」が大切なことばだとわかるとおもいます。ではイエスはなぜ「ほどく」にこだわったのか。

2) 罪の縄目

能登の地震のことですが、東京から能登の実家に帰ってお正月を家族一緒に楽しく過ごしていたら、まさにそのとき地震がきて家が崩れ、その下敷きになって家族が亡くなったというニュースが流れていました。こんな理不尽なことがあるのかと心が痛みます。だれもがこんなとき、神は何をしているのかと問いかけたくなります。地震の惨状を見れば、神はなにもしていないと言いたくなる。しかしそうではない。まさにこの問題を解決しようとされている。それが「ほどく」ということばに現れています。

私たちはアダムとエバ以来、罪を犯し、罪の縄目にかからめとられ、それ以来人は死ななければならなくなりました。あのろばのように、私たちは死という縄目につながれ、苦しんでいる。これが私たちの現実。その縄目を解くためにイエスは十字架におかかりになります。

3) 主がお入り用なのです

もちろんこの十字架の救いのみわざは、イエスお一人だけにしかできないこと。それは確かです。では、自分ひとりで全部きするので、あなたがあんなにもしなくてよいと言ったのか。そうではない。ここに何と書いていますか。「主がお入り用なのです。」直訳すればこうです。「主が子ろばを必要としているのです。」もちろんそれは、最初にふれたようにゼカリヤ書の預言が成就するためだったということではありますが、それだけではない。イエスは十字架という大きなみわざを行うために、まったく取るに足りないような小さなろばの力を借りようとされたというのです。そうするとどうなるか。先ほど「子ろば」は罪につながれている私たち人間のことだと言いました。ということは、イエスはこう語っていたことになる。「あなたは自分のことをなんの役にも立たない罪人だと思っていたかもしれないけれど、実はわたしはあなたの手が必要なのです。あなたを苦しめていた罪の縄目をわたしがほどくので、あなたはこれからわたしに力を貸してもらいたいのです。あなたと一緒に歩きたいのです。」

4) 主イエスとともに歩む

この世は、表では平等とか公平が大事とっています。でも陰では優秀な者だけが生きべきであるという価値観がまかり通っています。そんな競争からこぼれて落ちてしまうと、あなたは生きる価値がなくて役立たずだと言われる。それで、多くの人たちが自分は価値がないと思い込んで悩んでいく。

ではイエスはどうでしょうか。神のために働く優秀な人材を求めたのか。その反対です。「主がお入り用なのです」と言われたのは子ろばです。わたしには、人の役にも立てないような子ろばが必要なのです。そう語ってくださる。このろばは何をしたか。イエスを背に乗せてエルサレムに入りました。ろばは自分が何をしているかわかっていたのでしょうか。「いま、神のひとり子に乗せているのだ。」「自分はいま、この方を十字架のところまでお乗せしているのだ。」もちろんそんなことは知るはずはない。ただ、ろばとしての役割を淡々と果たしていっただけです。

皆さんこう思ったことはないですか。「私は神様のためにどうやったら役に立てるのだろうか。なにをすればいいかわからない。」分かれば嬉しいですが、分からなくてもいい。あのろばは背中に人

を乗せて運んだだけ。それが実は大きな働きをしていた。私たちもおなじ。今すべきことをただ忠実にしていただけなのです。

そんな日常を過ごしている私たちにあるときイエスはこう語るのです。「わたしを背中に乗せてエルサレムに連れて行ってくださいませんか。」イエスを背中に乗せる、そう考えただけで怖じ気づくでしょうか。「とても私には無理です。」でもイエスは言われました。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」(マタイ11章30節)

本当に負いやすいのだろうか。本当にこの方には軽いのだろうか。背負うまではまったくわかりません。信じるしかありません。でもイエスのことばを信じてイエスを背負う決心をした瞬間、はっきりわかった。私がこの方を背負うのではない。わたしが石につまずいて転びそうになると、この方が私のそばにおられ、手をしっかりと握って支えてくださる。「大丈夫、安心しなさい。この道と一緒にいこう。あなたはわたしにとって大切な人だから、あなたを決して見捨てはしないから。」また流れが急で恐ろしい川を渡らなければならない時は、この方が私を背負ってくださる。そのようにして主が同伴者となって歩んでくださいます。この方とともにまたこの一週間歩んでまいります。